博士論文要旨

中国語会話書から見た近代日本語の研究

園田 博文

これまで、中国語会話書は、中国語教育史や中国語学の分野でしか取り上げられてこなかった。本研究では、この中国語会話書を日本語学の分野で日本語資料としてどう位置付けるかについて論じた。中国語会話書とは、「学習書」「時文・尺牘」「語彙・辞典」等に細分される「中国語関係書」のうち、会話学習に関する例文集が載っている資料を指す。中国語文の訳文として日本語文が掲げられているもののほかに、日本語の発想で記された日本語文とその中国語訳が記される資料もある。対象とする時期については、明治初年から昭和20年までとした。

序章および第１部では、中国語会話書を分類し、主要人物７名を取り上げるともに、独自の時期区分を行った。背景としては、明治の初め、中国語を教えた教師は長崎唐通事であり、中国語を学んだ生徒は、長崎唐通事の子弟や漢学を学んだ者であった。中国語会話書も初めは、長崎唐通事に繋がる者や士族、漢学者の子息が著したものであった。留学生として清国に派遣された者もいた。中国語会話書を著した人物の背景を知ることで、たとえば士族の言葉に通じるものか否か等を知る手がかりが見出せる。

第２部では、Ⅰ期（明治初年から明治20年代中頃まで）に当たる草創期の中国語会話書について分析を行った。第３部では、Ⅱ－１期（日清戦争前夜から日露戦争前後まで）に当たる確立前期について、第４部では、Ⅱ－２期（日露戦争前後から第二次世界大戦終結まで）に当たる確立後期について見た。第５部では、Ⅰ期、Ⅱ期を通して、人称代名詞と当為表現について考察した。

本研究の成果は、資料（中国語会話書の分類を含む)、場面、語法・語彙に大別できる。

まず、資料研究について見ると、第２部第１章で行った『問答篇』『語言自邇集』と『総訳亜細亜言語集』『参訂漢語問答篇国字解』の対照から、日本語の発想による中国語原文改変の実態を明らかにすることができた。このことから、訳述である日本語の性格を考える手がかりが得られたことになり、意義が

認められる。また、第３部第２章においては、日清韓会話書の影響関係や成立過程を解明することができた。これら第２部・第３部における成果は、中国語教育史等の先行研究では明らかになっていなかった点であり、資料研究という点で重要であり、また、ここに現れる日本語の分析を行う上でも意義のあることである。資料に関連し、中国語会話書の分類を試みた。中国語文をもとに日本語文を作ったものについては、直訳度を考えることができる。これについては、第５部第１章第１節で人称代名詞の直訳度について、洋学会話書との比較を行いながら論じた。一方、日本語文をもとに中国語文を作ったものに関しては、さきに触れた改変の場合のほかにも、もともと日本語文が先である資料もある。この分析は、第３部第１章第１節で行ったが、今後の研究課題である。

次に、場面について述べる。もともと会話書は、豊富な場面における会話を載せている点に特徴がある。第４部で取り上げた『官話指南総訳』では、小説類には現れないような公的交渉の場面が数十ページに亘って現れている。しかもこのような場面に「しめ」「し」「たる」等の文語が現れている。文語が混じることについては種々議論がなされているが、実際に口語的な文脈の中に文語を交ぜて使ったと考えてよい。このような考察は中国語会話書を使わなければできないことであり、日本語資料として中国語会話書が不可欠であると言え、本研究の意義は大きい。第３部で取り上げた資料には、小説等では限定的にしか見られない戦争に関わる場面の表現や語彙が現れている。軍隊言葉や軍用語を考える際に中国語会話書を見ずに論じることはできない。

さらに、資料、場面を踏まえた上で、文末待遇表現、助動詞「です」、指定丁寧表現と形容詞丁寧表現（「明るいです」等の言い方)、「に」と「へ」の使い分け、当為表現、人称代名詞等問題となる語法について調査し分析した。たとえば、『総訳亜細亜言語集』に助動詞「です」が 1040 例も現れていたことの指摘は、明治 10 年代における助動詞「です」の使われ方を考える上で意味のあることである。また、『官話急就篇』総訳本４種における二重否定型当為表現の調査結果は、先行研究による国定読本の調査結果とも異なり、昭和初期の多様性を解明する上で欠くことのできないものである。語彙については、九州方言語彙、植物語彙について触れたほか、親族名称や漢語で特徴的なものがあることを指摘した。

本研究で明らかにした点とその意義は以上である。本研究から発展する課題は多数あり、さらなる研究が必要である。

論文審査結果の要旨および担当者

提　　出　　者	園田　博文
論文審査担当者	（主査）教授　斎藤　倫明 教授　小林　　隆 教授　才田いずみ 教授　佐竹　保子 教授　大木　一夫
論　　文　　名	中国語会話書から見た近代日本語の研究

本論文は、明治初期から第二次大戦終結までに日本で刊行された中国語会話書を対象とし、その日本語史資料としての性格とそこに記された日本語の近代語としての特徴を論じたものである。全体は、「序章」「終章」の他、全5部（全13章）から成る。

「序章」では本論文で取り上げる中国語会話書についての概念規定、分類、および本論文の目的、構成等について述べる。「第1部 中国語会話書・中国語教育の背景」では、本論文における考察の前提的な知識、すなわち、中国語会話書の時期区分、初期の中国語教育を考える上で重要な人物7名の紹介、当時の中国語教育の教師や生徒の内実について述べるとともに、中国語会話書107編の目録、「中国語教育・中国語会話書関連年表」等が提示される。「第2部 Ⅰ期（草創期）における日本語資料としての『語言自邇集』訳述書」では、日本の草創期の中国語会話書に大きな影響を与えたトーマス・ウェード著『語言自邇集』の訳述書9書を対象とし、助動詞「です」の用法や、「に」と「へ」の使い分け等についての検討を行ない、「です」が多数使用されていることや「に」「へ」使用に関する訳述者の方言の影響を確認している。「第3部 Ⅱ-1期（確立前期）における日本語資料としての日清韓会話書と台湾語会話書」では、考察対象を韓国語、台湾語を扱った会話書に拡げ、「～です」による指定丁寧表現や形容詞丁寧表現の実態調査や台湾語会話書に見られる植物語彙の分析などを行なっている。この時期は日清戦争前後から日露戦争前後までに当たっており、韓国語、台湾語学習の需要が高まったという背景があり、軍隊における会話場面も多く見られる。「第4部 Ⅱ-2期（確立後期）における日本語資料としての主要な中国語会話書」では、明治後期の代表的な中国語会話書『官話指南総訳』を主な対象とし、ワア行五段動詞連用形の音便の問題（ウ音便と促音便の拮抗状況）や質問文の諸相、公的交渉場面における文語使用の問題等について論じている。「第5部 中国語会話書における日本語訳文の特徴」では、これまでの考察方法と異なり、全時期から中国語会話書9書を選び出し、人称代名詞の直訳度、当為表現（特に二重否定表現）の時期的変化等について論じている。「終章」では本論文の各部のまとめと意義、今後の課題について述べている。

以上、本論文は、これまで中国学関係の分野でしか注目されてこなかった中国語会話書を対象とし、日本語学としてそれらをどう位置付けるか、そこに記されている日本語を近代日本語としてどう見るか、という点について論じたものである。相当数の中国語会話書の詳細な調査とこれまでの日本語学における近代語研究によって得られた知見との綿密な比較を通して、中国語会話書が日本語学の資料としても充分に活用可能であることを説得力のある論証によって十全に明らかにしている。

よって、本論文の提出者は、「博士（文学）」の学位を授与されるに充分な資格を有するものと認められる。